

恋愛文学の発生基層

中 塩 清 臣

「万葉集」巻十五の中臣宅守・狭野弟上娘子の作品抄は、まるでふたりの手記とも思惟されるかもしれない。だがかういふ種類の相聞往来物は、どのやうにして伝存保管が可能だつたのであらう。それに「万葉集」の本文が成立する以前に、どういふ経緯をくぐり条件なりをたどつて、本文の形態にまで作品が一括され、現行の編集をみるにいたつたのか。宅守と娘子とが合著の方法をとつて、自撰発表をこころみたのであらうか。どうもさうではないとすると、第三者の設計を想定しなければならぬ。つまり「純日本紀」の記載に関して、ひとまづみとめてゆくしかない。だからといつて同時にそれは、ただちに「万葉集」の歌唱まで配列順に、実際そのときの当座吟としてうけとることができる、といふ結論には決してならない。事件は事件として真相をつきとめ、歌唱を歌唱として截然と、別途の秩序において命題を追ふ必要があらう。

六十三首にのぼる短歌組曲は、物語歌↓芸謡のジャンルに属してゐる。いま六十三首をかぞえることができても、これさへ時運にしたがつての浮動数で、偶然さういふ定着のしかたをした場合の筆録↓転写にすぎない。ことごとくすべてフィクションか、いくつかの即物詠を主軸にしたデフォアメイションか、とにかくこの編集にとめた態度から微するとき、まづたく人歌物語Vとしての処理によ

つてゐる。すでにAことのかたりごとVになつてゐたからである。宅守も娘子もともに感情移入にたやすい階層であつたし、宮廷といふ——とかく理想郷あつかひされがちな——境遇を、背景に緩なしてくることは、世俗にすこぶるアツピールするところがある。宅守・娘子の相聞グループに表現されたかぎり、宅守の人間像は中臣語部を通じてかたちづくられてきた、物語歌および歌物語の主人公である。どこまでも情歌綺譚であつて紀事本末ではない。中臣の語部が伝承した短歌組曲、ことにいま結果からいつて、日本の書簡体恋愛小説の濫觴をしめす。

書契化にさきだつて贈答六十三首は、優倡か偶人かに因む楽劇台本↓戯曲編成の一部分だつたのであらう。歌詞——うたふ要素——と歌詞とのあひだには、かなり委細をつくす地の文章——かたる局面——が、さしはさまれてゐたのにちがひない。やがてかきとめられてのちに、採択されて「万葉集」巻十五へ、みちびきいれられたプロセスが、「万葉集」の目録・題詞・左註から、うかがふことができるところである。うたはれてゆく内容の副表現として、演技をともしなひ所作がふりつけられた。歌(↓抒情詩)をむすぶ物語(↓叙事詩)があつて、まづ歌のやりとりは会話だし、その唱和は歌日記風である。声楽に加へて器楽の——弾く・拍つ・叩く・吹く——

諸形式を伴奏にもつ。有耶無耶の架空人物であつても、幾世代をかくくぐるにしたがひ、特異のパソナリテをうみだして、しだいに構造物係をととのへてゆく。してみると正史と伝説とそれから芸術作用と、からみつきもつれあひながら起す、連鎖反応の軌跡をうべなふことは可能であらう。

— ゆふぐれば雲のはたてにものぞおもふ天つ空なる人を恋ふとて
（「古今集」卷一の一の四八四）

悲恋に根ざす青春彷徨のありやうを、山河こえわたる地理感覚で律する説話法↓道行にしても、いつも貴重漂泊↓神遍歴↓天子潛幸↓英雄放浪↓古譚につながる序列にあるばかりか、かきさて吟遊伶人（ほかひびと・くぐつ）の生活動態の輻射でもあつた。流寓のよすがを国憲背馳にことよせるのは、もう法制の確立以後の合理であらう。古代へさかのぼつてみるほど、個性をもたない文化環境ではあつたが、やはりエポソクをみちびき示標となる契機は、さすがに没個性のものではない。専門作家の叙事詩・抒情詩の改作↓新作が、しきりに好尚にかなひポピュラライズされて、長汀曲浦をつたひ山谷辺鄙をめぐつて、文学化をいざなひ芸能化をすすめてきた。実のところ宅守事件の全貌はさだかではない。女孺の純潔失格の罰といふ仮託相聞なら、姦通小説↓色懺悔物へ展開する類縁にある。ときにかういふ精神構造史に即して、寄与し感化影響をいちじるしくした、東漸の漢・晋・唐の舶載文芸も、つぶさにかへりみられなければならぬ。「万葉集」の相聞から「続万葉集」・「新撰万葉集」をへて、「古今集」の恋歌にいたる史的座標につながるからである。宅守・娘子聯唱のプロローグ四首、

— あしびきの山路越えむとする君をこころにもちて安けくもなし
（「万葉集」卷一五の三七三・「奈麻抄」）

— 君が行く道のながてを繰りたたね焼きほろぼさむ天の火

— もがも
（三七二四↓「仙覽全集」・「折口信天全集」）
— わが昔子しけだし麗らばしるたへの袖を振らさね見つ
（三七二五）
— 思はむ

— このごろは恋ひつつもあらむたまくしげ明けてをちよりすべなかるべし
（三七二六↓「興義抄」・「和歌一字抄」）

「万葉集」が△相聞▽と謳ふ分類法は、巻二からはじまつてゐて開巻して第一が、磐姫皇后の天皇を思ひたてまつる御作歌四首、

— 君が行き日ながくなりぬ山たづね迎へかゆかむ待ちにか
待たむ
（三八五↓「古今和歌六帖」・「和歌集」）
（「古采風体抄」）
（「色葉和雜集」）

— かくばかり恋ひつつあらずは高山の磐根し枕きて死なましものを
（三八六↓「折口信天全集」）

— ありつつも君をば待たむうち靡くわが黒髪に霜のおくま
でに
（三八七↓「古今和歌六帖」五・「麗花集」・「柿本集」）
（「和歌集」）
（「千五百番歌合」）
（「和歌集」）

— 秋の田の穂の上に霧らふ朝霞いづへのかたにわが恋ひや
まむ
（三八八↓「古今和歌六帖」五・「興義抄」）
（「和歌一字抄」）
（「古采風体抄」）
（「八雲御抄」）

ここでふたつの組歌を校勘し照合してゆくことによつて、恋愛文學の発生基層の序列・形成工程の路線を、さぐりだすことができる。それにしても磐姫皇后のケースは、△贈▽に対して天皇の△答▽がない。むろん磐姫の実作なら、「万葉集」でも最古の詠に属する。けれども伝説にすぎないわけは、「君が行き……」の第三―五句が、「山たづの迎へを往かむ待ちには待たじ」になつてゐて、「古事記にいはく……衣通玉の恋慕に堪へずして、追ひ往くときの歌……」といふ（九〇）。

— 右の一首の歌は、古事記と類聚歌林と説くところ同じからず。歌の主もまた異なり。よりにて日本紀を検ふるにいはく……

左註で古事記と類聚歌林との異伝にまつはる問題処理として、べつに仁徳紀・允恭紀とのつながりかたを提起してゐる。「君が行き」をめぐつて仁徳の皇后磐姫といふ口伝と、仁徳の皇子允恭天皇の皇女軽太郎女(↓衣通王↓衣通郎女)にあてゐる本縁とが、ひとしくならびおこなはれてきた状況説明になる。ところが伝承管理のみちすがら、「山たづね」・「山たづの」・「山たづの」・「山たづの」にほどこそ脚註にいふ「造木」は、「新撰字鏡」・「類聚名義抄」にもとめると「にはとこ」だが、この造木説におちつくアプローチとして、ひとつの民俗通念があつた。さかのぼるとこの「たづ」は、「鶴」(つるの古名)・鶴・鶴(鶴)の認識をたもつ。もとより水禽類・涉禽類の候鳥・漂鳥が、降神作法・招魂咒術の触媒・迎代だつた伝承印象から。天田振の「天飛む軽(↓雁)のをとめ」も、その「天飛ぶ鳥も使ぞ鶴が音の」でも、「山たづね」の実修方式に沿つてゐる構図で、白鳥処女と衣通郎女とのモンタージュさへはめかす。精神の耗弱とか生命の危急とかに際し、また歿後に蘇生をはかり復活をはげます手段として、いとなむ鎮魂咒法(たままひへしたまふりたま)が「山たづね」。だから巻二の「山たづね」は、むすびいたましづめ)が「山たづね」。だから巻二の「山たづね」は、「君が行き」と呼応した名詞形、それで「山たづの迎へ」とも映発してゆく。

――桜ばな 咲きなむとときに 山たづの、迎へ参でむ 君
が来まさば (『万葉集 卷六の九七』)

山稜・山狭のかしこに靈魂が、たむろする―神つまり神つどふ―禁忌の異郷を、みとめてゐた慣行にもとづく。たまふり・たましづめにさぎだち、たまごひ・たまむかへをしたので、語形がのちほど固定してただ「ごひ」・「むかへ」、とだけよぶやうになつた。「山たづね迎へか行かむ」や、「山たづの迎へを往かむ」は、

靈乞ひ・靈迎へ操作をよむありふれた表現である。「かくばかり恣ひつつあらずは」といつて、「高山の磐根し枕きて死なましものを」(八六)とうけとめてくるよるべも、さういふ生活空間の綾をうつつだす。まして靈乞ひをめぐる觀念体制が、幽明二界にわたる神人交渉から、異性間の恋愛關係にまでひろがつてきて、恋歌が相聞往來の主要部位を占めるやうにもなつた。相聞は生霊をむすびつける路線に、挽歌が死霊によひかける志向にあるが、相聞も挽歌も八靈乞ひに即して均一方式をふむために、異体のものながらふたつともに、同根等質といふわけになる。

磐姫皇后の四首も挽歌だつたにちがひない。それを相聞としてあらたに解釈づけてから、「万葉集」へみちびきいれられたのであらう。いつぼうで女性の鎮魂歌―いかり姫―姫をなごめる巫祝歌―としても、巻二にならべてきてゐる編集意図は、巻一の劈頭に猛々しかつた雄略天皇の伝御製の存在理由とも、たがひにかよふところがある。どちらも発想法は求愛のかたちをとつてゐる。古代の歌一般は書契記録をもつまでには、どれほどの変遷転移をへてゐるかわからない。つたへる作者とかかける詠唱とのつながりかたは、ひとたびうたがつてみる余地が多分にある。「磐姫皇后の天皇を思ひたてまつる御作歌四首」といふ題詞だつて、歴史小説の創作技法とあまりかはらない。愛と死をあつかふ表現の論理は、ことごとく同心円のうへにかさなりあふ。だが生への認識経験がふかまるにつれて、愛と死とにむかふ回転軸の位置が、すこしづつずれはじめてゆく。「万葉集」巻十二が「古今の相聞往來の歌の類」、その「別れを悲しふる歌」からの抄、
あしびきの片山雉立ちゆかむ君におくれてうつつしめや
(『三三〇』・「夫木和歌抄」・「言集集」)

狭野弟上娘子相聞の「京に留まりて悲しび傷みて作る歌」より、

— 春の日のうらがなしきにおく、いゝ、いゝ、君に恋ひつつ、うつつい
けめやも (三七五三)

磐姫の「君をば待たむ：わが黒髪に霜のおくまでに」の別本の歌が、「居明かして君をば待たむぬばだまのわが黒髪に霜はふるとも」(巻二の八九)。左註には「古歌集の中にいづ」と、テキスト校訂をこころみてゐる。けれども「古今和歌六帖」第五で「八かみ」の条、「のちつひに君をば待たむうちなびきわが黒髪に雪はふるとも」になつてゐて人麻呂の諷吟といふ。「万葉集」巻十二の「物に寄せて思ひを陳ぶる歌」から、

— 君待つと庭にしをればうちなびくわが黒髪に霜ぞおきに
ける (三〇四四→宗祇抄)

すると磐姫作といふ背景設定にしても、合理主義のほかのものではない。恋の主題追求で黒髪と霜とをとりあはせるモチイフなら、はるかに近代の律文ジャンルの情趣までも規範づけ、たとへば長唄「黒髪」や地唄「雪」—霜の変想—におよぶ。

狭野弟上娘子の激越かくしきれない詠みあげは、まだ前緒の挽歌↓誄詞の修辭法から、まつたく分離も脱却もしきつてゐないためである。だからどうしても挽歌の慟哭要因がもつ強調作用にひかれてゐる。遠国流浪の愛人への哀慕と、幽界逝去の死霊への慰撫と、ながめる次元をひとつにしてゐる。共通基層はたまごひ↓たまむかへだつたのだから。冥府へかくれた遊離魂にむかひ、ふたたびもどつてくるやうに愁訴・懇願するうたを語根としてうたふ(四段活)・うつつ(下二段活) — のが、挽歌のメカニズムをつらぬく原則である。感愛なり悲愴なり縷縷とあらはして、先方の共鳴をさそふ。泣くことは和めることだつた通過儀礼が、廢り荒城の神事だ。挽歌↓誄詞に賀詞・頌辭の性格がみえるわけである。それに誓約としての妥結が、うかがはれるのは鎮護詞系統の習奏だから。さうい

ふことの有機関係が、死者の場合でなくて、生身なまみにむかふときには、相關往來のかたちをとる。相聞と挽歌とのふたつから、羈旅歌の志向がひろがつてくる。輕の太子の物語も在五中將の日記も羈旅歷程譚、さらに宴曲抄から近世の心中物まで道行をともしなふことも、形成工程はまるではならないからである。「古今集」巻八は離別歌だ

— 君が行く越の白山しらねどもゆき(行・雪)のまにまに
あとはたづねむ (兼輔集・日本古典文学大系本「大和物語」七五段)

「万葉集」巻十二の「古今の相聞往來の歌の類」のうちには、「羈旅に思ひを發す歌」・「わかれを悲しふる歌」を読み解くだけでも、宅守娘子相聞がつながつてゆく座標の意味史はわかるにちがひない。

— 石の上 布留の尊はたわやめの まどひによりて 馬じ
もの 繩とりつけ 鹿猪じもの 弓矢かくみて おほぎみの
のみことかしこみ 天さかる 颯べにまかる ふるころ
も まつちの山ゆ かへり来ぬかも (万葉集 卷六の二〇一九)

「石上乙麻呂卿の土佐の国にながさえしときの歌」といふ、題詞をかかげる叙事詩脈の組歌であるが、この題詞も編集にともなつて後代からつけたものである。題詞どほりによみるととき、長歌三首・短歌一首といふわけだが、五首と書いてもかぞへたりしてゐる(仙覺↓国歌大観)。それほど原型を逸して毀損した作品形象をもつ。巻六へとりこむタイミングでさへ、もう古典化をとけてゐたからである。「懷風藻」に乙麻呂の五言四首をとどめてその序に謳

— …… 人才たいたい穎秀、雅容閑雅にして、はなはだ風儀によし。志を興たか墳かにつとむといへども、またすこぶる篇翰を愛す。かつて朝禮あそありて、南荒に飄寓す。淵にのぞみ沢にさまよひ、心を文藻に

写す。つひに「匭悲藻」両卷あり。いま世につたはる。：

けれども「匭悲藻」があるところを聴かない。それにいまの「万葉集」の乙麻呂詞華抄には、主格も人称にも矛盾がある。なによりもまづ「石の上布留の尊」は、乙麻呂そのひとの自称法ではない。神楽歌「石の上ふるや男」とひとしく三人称、石上地区の布留といふことが「石上布留」である。物部支族石上氏の鎮魂咒法の実修用語から地名定着へ。石上布留の神は「延喜式」卷九神名上にみえる、大和国山辺郡の「石上三座ス布留ノ御魂ノ神ノ社」（天理市布留）のつるぎ、これについて「袖中抄」卷十三には、ある時期の伝承生態をしるす。布留の地名にちなむ民間語原説をふまへて、本質は三輪山聖婚譚型につらなる。もとよりこの女は八棚機つ女だつた神道印象をただよはず。したがつてここにいふつるぎは、「山城国風土記逸文」の賀茂の社の丹塗りの矢、つづいて「出雲国風土記」の加賀の郷の金弓ともかよふ。つるぎ・丹塗りの矢・金弓すべて、男性器の象徴として Phallicism の脈絡をひく。「石の上布留の尊は：」・「わが背の君を：」といふ乙麻呂作品は、神代記の八千矛の神の相聞組曲が、「八千矛の神のみことは：」とうたひおこす、詠風とも恒等式に属する。八千矛の神の恋愛譚詩曲の分類名は八神詠である。

— ……いしたふや あまはせづかひ ことのかたりごと

こをば

雄略記の天皇・皇后・三重の采女の唱和、「この三つの歌は、天語歌なり」としるす相聞構造のどの末尾にも、「……ことのかたりごと」も「こをば」といふエピグラムを付す。してみると八神詠とは、八神語歌の後置修飾格の脱落でなければならぬ。神語歌も天語歌にしても、天(海)馳使(海)語部の所管にかかる。この宰領家が「海語連」(「統日本紀」)・「天語連」(「新撰姓氏録」)

である。八千矛の神のみこと物語が大歌なら、石の上布留のみこと物語はその近代版として、遊芸俗人の小歌がつづる楽劇台本だつた。「たわやめのまどひ」を主題にとりあげる時世粧である。すると同類項にあつたものが、どれほど隠滅し去つたことか、察知はすこぶる可能であらう。

かの木梨の軽の太子物語、同母妹軽の大女郎との近親婚で、志良官歌・夷振の上歌・宮人振・天田振・夷振の片下・詠歌とつらねてゆく場合も、偶然に文献化されてのこつたうちで、とりわけ好典型をしめすにちがひない。だが記紀すでに繁簡はちろん、伝承内容がちぐはぐしてある。そこでむろん事後の進行状況もことなつてゐる。同母血族の性交渉は、漢字にあてて八奸(姦)の範疇にあたる。だから「万葉集」卷二の左註は、「親親相奸」とかいてある(九〇)。これを八罪として裁きわけることは、政教未分だつた古神道のためしになかつた。妹(姉)が最高巫女としてまつりにつかへ、みこともちとしてうけとつて兄(弟)は、まつりごとへうつてきて実践化にとめる。結果の可否をつぶさに妹(姉)が中務(中宮・中皇命)として覆奏する。といふような循環方式のはこびに、古神道をつらぬく規制がある。そこで兄(弟)と妹(姉)とのまぐはひは、御床・神牀・神座の秘蹟機密として、聖母子綺譚のよすがをさそふ。この場面で膚接してゆく兄(弟)が、をこ神であるところの二重構造をもつてふるまふ。靈憑・魂依の対偶法にある。神代巻でイザナギノミコト・イザナミノミコトと、アマテラスオホミカミ・スサノヲノミコトとに験証があらう。儒・仏の来儀にさきだつ祖統譜・神統譜・皇統譜、あきらかにかういふ信仰秩序にもとづく。すると軽の太子・大郎女の一件にくだした醜聞認定は、破倫とか背徳どころか綱紀違反として、とりあつかはれてくるゆきがかりも、やはり社会通念の変革にもなつて、年

代誌的にも新時局にはいつてきてゐる。はるかくだつて歌舞妓狂言になると、「東海道四谷怪談」で直助権兵衛お袖、「三人吉三廓初買」の十三郎おとせのやうに兄妹姦の悲劇をいゝる。これは鶴屋南北とか河竹黙阿弥が綾なす、耽美とよぶより露悪がかつた演出感から、因果応報律でとりさばいてみせるのだが。

兄姫にして鶴屋↓正妻にあたる忍坂大中姫命から、うはなりねたみにあふ弟姫の衣通郎女なら、八千矛の神とスセリヒメとの三角関係にゐるヌナカハヒメ、仁徳天皇と磐媛とのあひだにたつた八田の若郎女→仁徳天皇の庶妹→とも、トボロジ→はまつたくひとつかさなる。允恭天皇の御名代部として飛鳥部、忍坂大中姫には刑部(忍坂部)をさだめ、弟姫の衣通郎女に対して藤原部をつくる。仁徳天皇のために雀部をもうけ、磐媛のが葛城部といはれ、八田の若郎女の八田部(矢田部→旧)と称してゐる。軽太子のは軽部である。軽の大郎女の衣通郎女と弟姫の衣通女との伝承区別は、つまり軽部と藤原部との職掌責任がちがつてゐたから。

— こもりくの 泊瀬の山の 大峽には 幡はりだて： ながさだめる 思ひ妻あはれ：のちもとりみる 思ひ妻あはれ
— こもりくの 泊瀬の川の 上つ瀬に 斎杭をうち： 真玉なす
あが思ふ妹 鏡なす あが思ふ妻 ありといはばこそよ 家にも行かぬ 国をも惚ばぬ (「允恭記」)

允恭記が「このふた歌は詠歌なり」といふよ、みうた、その成立も本質にしても葬送儀礼歌にある。ことごとくメカニズムは、妻恋ひ・国恩びをもつて回転軸とする。斎場(ゆにはい)の矚目詠物法は、祭具をよみあげ葬器をかぞへたててゆく。そこでよみうたは算歌・頌詞におさまるまで黄泉歌だつた。「君が行きけながくなりぬ：」「万葉集」巻二もよみうた、八ヶVをよむことがけよみ、これから八こよみ(暦)Vになる。だから「：相見ねば月日よみつつ妹待つらむ

ぞ」(「万葉集」卷一七の三九八二)。「：朝寝髪 かきもげづらすいでて来し 月日よみつつ：」(卷一八の四一〇一)。「：わかき妻をまます あらたまの 月日よみつつ：」(卷二〇の四三三二)、「といふ修辭もみちびかれてくるわけである。月↓月読の運行をたぐつて推計学風に、大陰曆の体系基準をつくる。と同時によみが死の国↓常世の国につながつて、ツキ(夕)ヨミノミコトの冥界行→神去り・雲がくれ→ものをがたる。詠歌の「：櫛弓の 臥やる臥やりも 梓弓 起てり起ても：」の八櫛弓(つきゆみ)も副意識に八月読(つきよみ)Vをかざせてゐる。山たづねの霊迎へ方式をうたふところから、降神・招魂の呪物としての櫛弓を表面化させてくる。すると櫛弓より梓弓→真弓へは、ひとつづきの慣用発想をさそふ。つづいて八まつV↓まちは、うらなひ(卜占)・まじなひ(厭勝)の術語である。出現・啓示をしきりにねがふことが、八こふV(乞乙類・四段活)↓八こひV(恋一甲類・上二段活用)である。まちはまつりの意味をふくむ(庚申まぢ・二十三夜まぢ)。

— こもりくの 泊瀬の川の 上つ瀬に 斎杭をうち： 真玉なす
わが思ふ妹も 鏡なす わが思ふ妹も ありといはばこそ 国にも家にも行かぬ 誰がゆゑ行かむ (「万葉集」卷一三の三三六三)
古事記を検ふるには、件の歌は、木梨の軽太子のみづから、身まかりしときにつくる、といへり。

反歌
— 年わたるまでにも人は有りといふをいつの時にそもわが恋ひにける (「三三六四」古今和歌六帖)
ある書の反歌には、
— よのなかを倦しと思ひて家出せしわれや何にか還りて成らむ
伝承をかきねてくる途次で、反歌をあはせてきたやうである。(「三三六五」)

にかく葬送儀礼歌↓挽歌↓哀傷歌が、相聞↓恋歌にうつりかはる工程をつぶさにみせてゐる。とくに「年わたるまでにも…いつの間にそも…」は、いちじるしくけよみうたの性格がめだつ。ここに注目し値する問題と件がある。「万葉集」で「古事記」とテキスト校合をくりかへしてゐる作品は、軽太子をめぐるグループにかぎられてゐる。といふことは要するに、万葉集形成史とも内部交渉をたもつ枢機のこととがらにちがひない。古事記のよみうた↓死靈譚歌曲↓算歌・嘉歌！が、「万葉集」の相聞にくりこまれてゆく楔点をうがちながら。やがてよみうたは二序にわかればじめて、死との関係をたどるのは挽歌へ、生の方向にふかまるのが相聞へ。これから思国(↓家・妻)歌をへて、「琴歌譜」にのせるやうなよみうたをさそふ。かういふよみうたになると、思国歌に国見歌がかざなつてきてゐる。それに「大君を 島にはふらば…」の夷振の片下も、「天飛ぶ鳥も使ぞ…わが名問はさね」の天田振にしても、蘇生をうけひまち復活をむかへこふ、たまよばひうた↓たまふりうた(鎮魂歌)から、かむはふりうた↓たまはふりうた(葬送儀歌)へうつされてゐる。古事記には組曲としてひとまとめに、配流者の羈旅歌に應用をこころみてゐる。△葬る△は△放る△ことだつたから。霊を△とむ(尋・覓・求)△ゆかりに、△とむらふ(葬・訪・弔)△とむらふ△。このとむなら△とふ△・△まく△・△たづぬ△にかよふ。よみうたは相聞とも挽歌としても、あつかはれてゐた例示ができる。

反歌

― ひとり寝る夜をかぞへむと思へども恋のしげきに情利もなし
(「三三七五」↓「万葉集註釈」・「宗祇抄」)

― せむすべの たづきを知らに 石が根の こごしき道を 岩床の 根延へる門を … 思ひつつ わが寝る夜らを よみもあへむかも
(「万葉集」卷一三の三二四―三三九)

卷十三で部門ごととふたところ、それぞれのところだしてある。ただ相聞は反歌をともなつて、挽歌がそれをもたぬだけである。だが挽歌にはこの長歌構成の前半位がある。そこでつぎにあげる大伴家持の作品、「たちまちに枉疾にしづみ、ほとほとに泉路にのぞむ。よりに歌詞をつくりて、悲緒をのぶる一首」は、状況証明に委曲をつくしてゐるものだが、

― …年月も いくらもあらぬに…うつせみの 世の人なれば
 うちなびき 床にこいふし 痛けくし 日にけにまざる…妻のみことも 叫けくれば 門によりたち…夕されば…黒髪しきていつしかと 嘆かすらむそ…せむすべの たづきを知らに かくしてや 荒し男すらに 嘆きふせらむ(万葉集卷一七の三九六)と漸層的にたみこんでゆく表現に徴してみても、どれほど詠詞要素をつぎぬけてゐるであらうか。さらにそれから石上乙麻呂相聞にうたふ抄、

― 大君の みことかしこみ…いけますやわが背の君を かけまくも ゆゆしかしこし 住吉の 現人神…荒き波 風にあはせず…すみやけく かへしたまはね 本つ国べに
(「万葉集」卷六の二〇三―二二)

これと構造も均質であつて、修辭にしても等価の作品は、「天平五年に、入唐使に贈る歌一首」(作主つまびらかならず)である。

― …日の入る国に つかはさる わが背の君を かけまくの ゆゆしかしこき 住吉の わが大御神…荒き風 波にあはせず たらひけく 率てかへりませ 本つ国家に
(「万葉集」卷一九の四二四―五)

なるほどかがへる細部ではいり、わづかながら創作機能はほのめいてゐる。それでも海路舟航に際してよみあげる、定型の寿詞のほかのものではない。「父公に われは真名子ぞ…妣刀自に…わ

れは愛児ぞ……、とうたふけれども乙麻呂にとつて父の麻呂とするなら、さきに養老元年三月に薨じてゐる（「続日本紀」）。△妣Ⅴの字は歿後の母をさすから、乙麻呂の年令にあてると妥当をかく。まして「万葉集」巻一三挽歌の「…母父に 真名子にかあらむ」（三三三六）・「…母父の愛子にもあらむ…」（三三三九）ともども、とかく挽歌によまれる通俗技法にすぎない。乙麻呂土佐行の座標軸が、しだいに滄浜飄蕩の哀傷歌を展開させて、

船

― わたのはら八十島かけて漕ぎいでぬと人にはつげよ海人の釣

（小野 算一「古今集」巻九の四〇七↓「新撰和歌」・「金玉集」・「新撰髓腦」・「今昔物語」巻二四の四五・「古来風舩抄」下・「前々太平記」巻二二…）

― ほのぼのと明石の浦の朝霧に島がくれゆく船をしぞおもふ

（「古今集」巻九の四〇九↓「新撰和歌」・「古今和歌六帖」三・「柿本集」下・「和漢朗詠集」下・「金玉集」・「三十六歌仙」・「今昔物語」巻二四の四五・「今鏡」五・「古来風舩抄」下・「俊頼髓腦」上・「袖中抄」二二…）

― わくらははにとふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつつわぶと答へ

（在原行平一「古今集」巻一八の九六二↓「新撰和歌」三・「古今和歌六帖」三・「奥義抄」七・「撰集抄」・「歌林良材集」上・冥曲「名所恋」…）

とうたふやうに繚乱と百花斉放をいざなふ。ことに行平の「わくらははに…」が「源氏物語」の須磨の巻制作へのモメントになる（「折口信天全集」）。人に知られないでゆきつづける羈旅の寂寞感が、冥想・諦観の歌境をくりひろげてくる。ともすると羈旅歌に相聞構造をととのへるわけは、愛人の靈魂をたがひに分けあつて、もち歩いてゐた咒術実修から。けれどもとりたてて乙麻呂配流詠には、宅

守・娘子の唱和もどきのプロットがない。「雑歌」の部門にあつめられた理由であらう。だが「万葉集」巻六へ編みこまれるのに、さきだつプログラムはどうだつたか。乙麻呂を貴種漂泊綺譚の主人公になぞらひ、情史をいろどるパーソナリティとして、遊芸派の演

出意欲をそそつた潤色物の断簡が、この連珠組歌にちがひない。